

一般社団法人

日本小児看護学会

Japanese Society of Child Health Nursing

News Letter

日本小児看護学会 第28回学術集会開催に向けて

学術集会長 奈良間 美保
(名古屋大学大学院医学系研究科)



日本小児看護学会第28回学術集会の開催まで1か月程となりました。本学術集会に様々な形でご支援、ご協力いただいております皆様へ心より感謝申し上げます。

今回の学術集会のテーマは、「子ども、家族とともにある看護」といたしました。

「ともにある」という言葉を手がかりに、子どもと家族の看護について皆様と一緒に考えたり、感じたりする機会となりましたら幸いです。

会員の皆様におかれましては、学術集会のテーマセッション、一般演題に多数ご登録いただきありがとうございます。学術集会では子どもや家族の体験や看護、多職種連携等の幅広い内容で貴重なご報告をいただけることと思います。小児看護の充実に向けて活発な討議が行われることを心から願っています。

さて、本学術集会の内容をご紹介します。1日目の特別講演は、絵本作家の宮西達也先生に「ニャーゴのやさしさ・ティラノのおもいやり」のテーマでご講演いただきます。本学術集会ホームページ、ポスターや看板など様々なところに登場するアンキロサウルスのあかちゃんとティラノサウルスのしっぽ、宮西先生の世界に触れながらふわ～っと心が温くなる感覚を体験い

ただきたく思います。また、2日目には、内田樹先生に「『修行と葛藤』～生きる知恵と力を高めるために」のテーマでご講演いただきます。子どもたちの心身の変化、そして人が葛藤する意味などを深く考えていただく機会となるのではと思います。また、今回の学術集会では、新たにお子さんとご家族に参加いただく企画を設けています。一つは親の会と学術集会との協働企画のセッション「子どもたちの自立について考えてみませんか」を計画いたしました。家族と医療者という立場の違いを越えて、ともに子どもを支えるという視点から討議を行いたいと思います。もう一つはみんなで作るシンポジウムです。テーマは「子ども、家族とともにある医療」としました。日頃から子どもと家族の支援にあたっておられるシンポジストの方々の実体験を報告いただき、親の会からの参加者とともに会場でのディスカッションを通して、あるべき答えを見つけるのではなく、答えを見出しにくいことにどのように向き合うのかを共有したいと考えています。

学術集会1日目の夕方には、同会場のレストランで懇親会を開催します。手話ダンスで心や体を癒していただきながら、施設や立場を越えて小児看護の輪を広げる機会になればと思います。多くの方々のご参加を心よりお待ちしております。

日本小児看護学会 第28回学術集会ご案内

学術集会テーマ：子ども、家族とともにある看護

【会 期】2018年7月21日(土)～22日(日)

【会 場】名古屋国際会議場(名古屋市熱田区)

【プログラム】

1日目 7月21日(土)

会長講演 「子どもと家族が主体であること、看護がともにあること」
奈良間 美保(名古屋大学大学院医学系研究科 教授)

特別講演1 「ニャーゴのやさしさ・ティラノのおもいやり」
宮西 達也(絵本作家)

親の会との協働企画 「子どもたちの自立について考えてみませんか」
みんなで作るシンポジウム 「子ども、家族とともにある医療
- 視点がかわれば、医療がかわる!？」

テーマセッション、一般演題(口演・示説)

2日目 7月22日(日)

特別講演2 「『修行と葛藤』～生きる知恵と力を高めるために」
内田 樹(凱風館館長/神戸女学院大学名誉教授)

共催セミナー 「正しく知ろう、小児のてんかん」

テーマセッション、一般演題(口演・示説)

【第28回学術集会ホームページ】

<http://www.cs-oto.com/jschn28/>

【参加費用】

当日 会員：12,000円 非会員：14,000円
(事前 会員：10,000円 非会員：12,000円)

*非会員の参加費には消費税が含まれます。

【連絡先】

<学術的なお問い合わせ>

名古屋大学大学院医学系研究科看護学専攻

〒461-8673 名古屋市東区大幸南1-1-20

E-mail : jschn28@umin.ac.jp

<運営に関するお問い合わせ>

株式会社オフィス・テイクワン

〒451-0075 名古屋市西区康生通2-26

E-mail : jschn28@cs-oto.com

Tel : 052-508-8510 Fax : 052-508-8540

委員会活動紹介 編集委員会

～学会誌の編集と発刊を通じた科学的基盤形成の取り組み～

- 委員長：塩飽 仁
- 委員：相墨 生恵、荒木 暁子、有田 直子、井上由紀子、入江 亘、小川 純子
今田 志保、今野 美紀、菅原 明子、新家 一輝、水野 芳子

編集委員会は、日本小児看護学会誌の論文投稿受付、査読依頼、採否決定、掲載論文のオンライン公開、冊子体での学会誌の編集と発刊を担当しています。

2017年からは、掲載論文を年3回(3月・7月・11月)、冊子体発刊に先行してJ-STAGEでオンラインファースト公開しています。あわせて、年度内にJ-STAGEで公開した論文を収録し、12月に冊子体による学会誌の発刊を行っています。また投稿の利便性と査読の迅速化を図るため、2017年からオンライン投稿・査読システムであるEditorial Managerを導入しました。編集委員会はこれらの活動を通して、小児看護の科学的基盤の形成と看護実践の質の向上に貢献する研究成果を社会へ発信しています。

現在、様々な学術研究領域で、急速に論文のオープンアクセス化が進んでいます。オープンアクセス化とは、誰でもwebを通して無料で自由に論文へアクセスできるようにすることです。研究成果の公表とその活用を積極的に推進し、その成果を社会に迅速に還元するための動静であり、情報通信技術の発展により実現可能となり、オープンアクセス化は世界規模で一気に拡大しています。

日本小児看護学会は国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)が構築した「科学技術情報発信・流通総合システム」(J-STAGE)と契約を結び、オープンアクセスを提供しています。2018年6月4日現在、日本小児看護学会誌に掲載された全論文519編と日本小児看護研究学会誌に掲載された全論文76編を公

開しています。J-STAGEでの公開後、月間アクセス数は1から2万件、ダウンロードは月間1万件前後で推移しています。

紙の原稿で投稿・査読を行っていた2016年度の投稿数は56本でしたが、Editorial Manager導入後の2017年度は85本となり、2017年度は前年度比152%と大幅に増加しました。

2017年6月のEditorial Manager導入後1年間で採否が決定した論文は21編であり、そのうち掲載が決まった論文は11編、再投稿を辞退された論文は10編という状況です。2018年7月末にJ-STAGEで公開する論文は6本(研究4編、研究報告1編、資料1編)です。

このように新しいシステムを導入して投稿・査読・論文公開・出版を行うようになり、会員の論文投稿、専任査読員による電子査読、編集委員による編集は1年を経て、やっと軌道に乗ってきた感があります。今後は投稿から採否決定までの期間をよりスピーディーになるよう努力していきます。そのために専任査読員と編集委員数を増強しつつ、2019年に投稿と査読の質向上のための講習会を行う計画です。

学会誌の発刊は、会員の論文投稿と、専任査読員の査読に支えられています。会員の皆様においては、日頃の取り組みの成果を積極的に投稿いただきたいと思います。また専任査読員の皆様には感謝申し上げるとともに、今後も継続してご協力いただきたいと思います。

小児看護政策委員会 活動報告

小児看護政策委員会は、1) 政策に関する活動、2) 健やか親子21(第2次)推進に関する活動、3) 医療事故調査等への協力、などを行っています。政策に関する活動では、子どもと家族を取り巻く社会のニーズや実態を把握し、社会の動向を反映した提言を行います。これまで、看護学教育モデル・コア・カリキュラム策定に関する意見書や小児救急看護認定看護師養成課程休講に関する意見書などを出してきました。また、平成27年からは「すべての子どもが健やかに育つ社会」を目指して、健やか親子21(第2次)推進事業として、「育児支援等」の活動テーマに取り組んでいます。

平成29年度の活動では、健やか親子21(第2次)推進事業への参加団体としての取り組みについて、「第17回健やか親子21推進協議会」(平成30年2月28日)への参加内容と併せてご紹介致します。

1. テーマ別グループ会議での討議内容

本学会は、2つのテーマ別グループにエントリーしています。「テーマ2:育児支援等」では、前年度、17団体に対して「取り組むべき項目」を調査した結果、「児童虐待による死亡数、子どもを虐待していると思われる割合、10代の自殺死亡率」が課題として出されました。それに対して、妊娠期に始まる虐待予防の支援として、各団体が強みを出し合うシンポジウムや情報提供のネットワークの構築、出前講師のデータベース化などが話し合われました。「テーマ4:調査研究やカウンセリング体制の充実・ガイドラインの作成等」では、前年度の自殺防止に対する学会の取り組み状況の

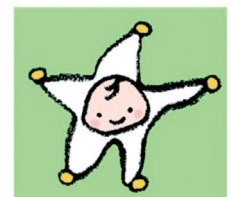
- 委員長：及川 郁子
- 委員：荒木 暁子、来生奈巳子、佐藤 奈保、西田みゆき、沢口 恵

発表の他、トピックスを決めての学会合同シンポジウムの開催やリーフレット作成などが討議されました。これらテーマ別グループ討議を通し、引き続き各団体・学会に対し健やか親子推進活動の支援が依頼されました。

2. 総会

厚生労働省(以下厚労省)子ども家庭局長からは、①子育て世代包括支援センターの設置増大、②産婦健康診査事業(産後うつ、新生児虐待防止)は増額、③マタニティマーク(H29)、妊産婦の食育(H30)が普及啓発活動として取り組まれると話されました。尚、シンボルマーク「すこりん」の活用を奨励されています。そして、母子保健分野において「第6回健康寿命をのばそう!アワード厚生労働省最優秀賞(企画部門)」で受賞した小児科医師によるオンライン相談サービスの紹介がありました。詳細は厚労省のホームページをご覧ください。

本学会は、健やか親子21開始時から、参加団体として取り組んでおります。今後は、厚労省の掲げる「地域子ども・子育て支援事業について」に対して、小児看護師の活動の場の拡大のために、どのような活動が行われているか、どのような支援が必要かを検討していきます。



健やか親子21

<健やか親子21(第2次)シンボルマーク すこりん>
<http://sukoyaka21.jp/general/symbol-mark>



「リレートーク」朝野春美さん



自己紹介

生まれは栃木県黒羽町（現大田原市）です。中学、高校と部活に励みました。部活でよい指導者に恵まれた私は、「部活の先生」になることが夢でした。進路指導で先生の勧めもあり、名古屋の大学に進学しました。その後、地元に戻り、大学病院で子どものいる病棟で働きました。短大と大学で小児看護の教員をした後、再び、大学病院に子ども医療センターを開設するために病院に戻り、看護部長を務め、今年、無事に部長職を卒業しました。

看護師になったきっかけ

進路指導の先生に体力があるから看護師を勧められたことと、その時、推薦を受けられる大学があったということで、看護系の大学に進みました。小児看護の実習をしているときに教員に「子どもをよく観察している」と褒められたこともあって、子どもを支援する看護師になりたいと思い、小児看護を選びました。部活で多くの方に支援していただいたことで、自分も支援する人になりたいと思ったのでしょうか。

新人時代の思い出

医師に「ハンマーを持ってきて」と言われて、打鍵器ではなく、金づちを持って行ったという失敗談もあります。

新人時代に会った師長が大変厳しい人で、自分たちの都合で変えることは認めてもらえませんでした。子どもや家族にとって変えたいことは認められました。何かを変えるときは、ゆるぎない信念と確固とした事実が必要であることを教えてくれました。小児の学童病棟では朝、起きられない子どもの看護計画で、7時前に医師と看護師がグラウンドで集合し、ソフトボールをすることを立案したことがあり、今では考えられない看護計画ですが、師長は認めてくれました。準夜明けでもグラウンドに行った覚えがあります。

小児看護の魅力

子ども達の成長・発達にかかわれることが魅力です。

入院生活は人生の一部ですが、人生を左右する機会に関わるところがいいです。ある時、子どもにこんなことを言われました。「看護師はすごい。俺たちの病気を治すことだけでなく、人生を治すことをしているからすごい。」病気が治って、社会に戻っていく子どもたちを支援できるところが楽しかったです。

ストレス解消法

自分が思ったことはすぐにやるほうなので、あまりストレスはためません。でも、きれいな景色を見ることがストレス解消になります。年1回は、海外や国内を旅行しています。フィジー、ネパール、カナダ、ニュージーランド等々に行きました。国内は、徳島県以外すべて行っています。きれいな景色を描いた絵を見ることが好きで、美術館巡りもします。

後輩たちに期待すること

医療的ケアを必要とする子どもたちが増えてきています。目の前の子どもと家族が生きていく力を持てるように支えてほしいと願っています。生活を支えていく視点を忘れずに、どうやって生きていくのかを一緒に考え、支えてほしい。病院でできることは限られています。退院後の生活も見据えてケアを考え、自分の置かれている立場で、子ども・家族に真摯に向き合い、全力を尽くしてほしいと思います。ボランティアを含め、医療者以外の方と協働していくことも忘れないでほしいと思います。

バトンを受けて欲しい人 斎藤依子さん

研究助成および国際学術会議 研究発表助成についてご案内

学術・研究推進委員会

●委員長：楳木野裕美

●委員：内 正子、泊 祐子、小野 智美、中谷 扶美、
長田 暁子、岡崎 裕子

日本小児看護学会では、小児看護の実践・教育に関する調査・研究を奨励し、サポートしていくために研究助成、国際学術会議研究発表助成の制度があります。

【研究助成】は、子どもたちの健康推進に寄与するため、小児看護の実践・教育に関する調査・研究について、小児看護実践家を対象に研究助成を行い、我が国の小児看護の発展を図ることが目的です。助成対象になるテーマは、小児看護活動や業務に関する研究、実践の新しい取り組みに関する研究などの小児看護実践に根差したもので、1件10万円程度で年間2件の助成を行います。助成対象者は、会費を納入している会員で個人またはグループで、小児看護実践者を優先しています。研究助成金は、研究計画の遂行やそのとりまとめに必要な経費、申請額50%以内での備品の購入をしていただくことができます。締め切りは11月末です。

【国際学術会議研究発表助成】は、名誉会員川出富貴子先生からのご寄付により、国際学術会議で研究成果を広く世界に発信したり、世界の様々な国の小児看護実践者・教育者との交流による学会員の見聞を広めることで、我が国の小児看護の発展を図ることが目的です。研究助成金は、1件10万円程度で年間3件程度の助成を行います。助成対象者は、渡航費、宿泊費、国際学術会議参加費等に当てることができます。締め切りは4月末・11月末の2回です。

いずれの研究助成の詳細についてもホームページでお示ししています。会員の皆様には、是非、研究助成制度を活用し、調査・研究を進めていただきたいと思います。

2017年度 日本小児看護学会地方会（四国地区）を終えて

2017年度地方会代表者
小川 佳代



2018年3月10日(土)徳島県徳島市の四国大学キャンパスにおいて「育児を支える小児看護—様々な医療ニーズのある子どもへの支援—」のテーマで地方会を開催いたしました。四国地区で初めての開催であり、子どもたちの人口も減少の一途をたどっているこの地で、子どもと家族を支援する専門職の方々がどれ位ご参加くださるのか、とても心配でした。しかし、当日は、会員と非会員合わせて85名、運営委員の皆様13名、ボランティアの学生10名の計108名の方々に研修会を行うことができましたこと、心よりお礼申し上げます。

本研修会では、全体会として教育講演とシンポジウムを行いました。教育講演としては、医療法人社団仁愛会理事長の宮崎雅仁先生に「脳科学を活かした子育て」のテーマでご講演いただきました。発達障害のある子どもに限らず全ての子どもの子育てに脳科学を活かす工夫が重要であり、特に4-5歳児が最重要な時期であることを改めて伝えていただきました。

複雑に感じる脳神経の病態生理も笑いを交えながらお話くださり、あっという間の60分でした。多くの参加者から「もっとお聞きしたかった」という感想をいただきました。



シンポジウムは「様々な生活場面における、医療ニーズを持つ子どもと家族への支援を考える」というテーマで、GCUの看護師、療育施設の発達支援担当者、養護教諭、在宅訪問看護ステーションの看護師、大学教員ということも家族に関わる様々な専門職としての立場から、日頃の活動内容や課題等についてご紹介いただきました。子どもたちの様々な生活場面における様子を子どもたちの目線でお伝えいただき、それぞれの立場で発見もあり、同時にお互いに協力し合う重要性を共有できました。

その後、ポスターセッション方式で、様々な医療ニーズを持つ子どもと家族への支援を実践されている様子を示しながら、自由に情報交換を行いました。興味と関心のある活動について、活発にかつ具体的に質問や意見交換が行え、今後の活動のヒントが得られたという感想も見られました。

半日の短い時間でしたが、医療ニーズを持つ子どもと家族の方々が、様々な専門職の支援を得ながらより良いQOLを目指して日々生活していることを実感し、私たちがより一層連携する必要性を共有できたいへん有意義な場になりました。

半日の短い時間でしたが、医療ニーズを持つ子どもと家族の方々が、様々な専門職の支援を得ながらより良いQOLを目指して日々生活していることを実感し、私たちがより一層連携する必要性を共有できたいへん有意義な場になりました。



教育委員会 活動報告

教育委員会 ●委員長：勝田 仁美
●委員：二宮 啓子、友田 尋子、濱田 米紀、河俣あゆみ

2017年度教育委員会で毎年開催しています研修会のご報告をさせていただきます。



子どもは発達の特徴から言語的なコミュニケーションが難しく、非言語的な子どもの要求を捉えるためには高い感受性と観察力が必要になるため、小児看護において子どもとのコミュニケーション

は大切な技術です。子どもが生活するどの場面においても、子ども自身が発する言語的・非言語的な要求を捉え、それに応えるためには、コミュニケーションスキルを身につけることが重要となります。あらためて、子どもや家族とのコミュニケーションについて考える機会とし、講義と、事例を通したグループワークを行いました。

テーマ：「子どもと家族とのかかわりから始めるケア—小児看護におけるコミュニケーションスキルを身につけよう—」

開催日・場所：2017年3月3日(土)10時～16時
兵庫県立こども病院 講堂

プログラム：

講演I：子どもとのコミュニケーション

河俣 あゆみ(兵庫県立大学 小児看護 CNS)、

講演II：家族とのコミュニケーション

濱田 米紀 (兵庫県立こども病院 小児看護 CNS)。

グループワーク(事例を通して考えよう)及び発表：事例は、2歳や思春期の子どもとの場面や親の場面をグループに分かれて行いま

した。各グループ討議では、小児看護専門看護師5名にもファンリテーターとして協力を得ました。

参加者：60名(会員17名、非会員43名)

終了後のアンケート結果(回収率90%)：当初、参加者は小児病棟に勤める1・2年目の新人が多いだろうと想像していましたが、臨床経験の長い人もおり、小児病棟に次いで混合病棟、救急部門が多く、子ども中心の臨床現場ではないからこそその苦労なども研修会参加の動機のようなものでした。また、研修会へ参加しての評価は、とても良かった・そう思う(98.2%)が多く、理由としては、他の施設の人と様々な話ができて良かった、多くの刺激をもらった、具体的事例で実際に実践(外来でも)につながるものだった等でした。



普段、付き添う親に任せ切りになっていたり、電子カルテの扱いなど多忙で、子どもや家族に近い存在であるはずが遠くにいるように感じていた参加者が、どんな状況であっても子どもや家族の思いに近づけるようコミュニケーション能力を高めて充実した看護を提供できると良いなと願っています。

広報委員会メンバー ●委員長：江本リナ ●委員：上別府圭子、西田みゆき、安田恵美子、吉野 純、鶴巻香奈子